

令和7年3月13日

報道関係各社 担当者殿

一般社団法人 日本救急医学会
代表理事 溝端 康光

救急医療における先端テクノロジー活用特別委員会
担当理事 横堀 将司
委員長 田上 隆



プレスリリース 人工知能チャットボットを用いた救急重症度判断における注意点

謹啓

時下ますますご清祥のこととお慶び申し上げます。また、平素より格別のご高配を賜り、厚くお礼申し上げます。

さて、我が国では年間 620 万人以上が救急搬送され、そのうち約半数が軽症例とされています。このような中、適切な受診を促す取り組みが進められているものの、救急外来の混雑と医療リソースの不足は依然として大きな社会課題となっています。

近年では大規模言語モデル (LLM) を用いた人工知能チャットボット (以下 AI チャットボット) が普及し、日常生活にも浸透しつつあります。AI チャットボットは対話形式でのやり取りが瞬時に可能であり、医療に関する助言などへの応用が期待されています。しかし、AI チャットボットが回答した救急外来受診要否の判断の正確性や、回答内容に対する利用者 (非医療従事者) の理解度については検証されていませんでした。

一般社団法人日本救急医学会は、市民の安心安全のため、先端技術の救急医療応用への妥当性を検証すべく「救急医療における先端テクノロジー活用特別委員会」を組織し、活動して参りました。

本研究では、総務省消防庁の『緊急度判定プロトコル Ver.3 救急受診ガイド』をもとに、合計 466 の症例シナリオを想定して LLM (GPT-3.5) に「救急受診の必要性」を尋ねました。その回答を、救急科専門医を含む 7 名の医療従事者が医学的観点から評価したうえで、非医療従事者 157 名がどのように受け取るかをアンケート方式で検証しました。その結果、医学知識を持った専門家は LLM が救急外来受診の判断を高精度でアドバイスしていると評価した一方で、非医療従事者は同じ回答を見ても専門家と異なる解釈をする傾向があることが明らかになりました。これにより、AI が生成する医療アドバイス自体の解釈が非医療従事者は難しく、特に救急医療においては、医療従事者の適切な指導、すなわち医療従事者によるサポートや平易な言葉への置き換えなど、誤解を防ぐ工夫が求められることが示唆されました。

医療における AI 技術の活用については、市民や多くのメディアの方々も関心が高いものと弊学会も理解しております。本研究の詳細と弊学会の見解を記載しました報告書を添付いたしますので、メディアの皆様におかれましては、市民の方々に広くご発信くださいますようお願い申し上げます。

弊学会は学術団体として、市民の皆様が AI を適正に使用することができるよう、研究活動や啓発活動を進めて参ります。どうか引き続きのご支援のほどよろしく願いいたします。

謹白

【本件のお問合せ】

一般社団法人 日本救急医学会

日本救急医学会事務所

担当 松本

jaam-5@bz03.plala.or.jp

〒113-0033 東京都文京区本郷 3-3-12 ケイズビルディング 3F

TEL 03-5840-9870 FAX 03-5840-9876